全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第1章「3・11」

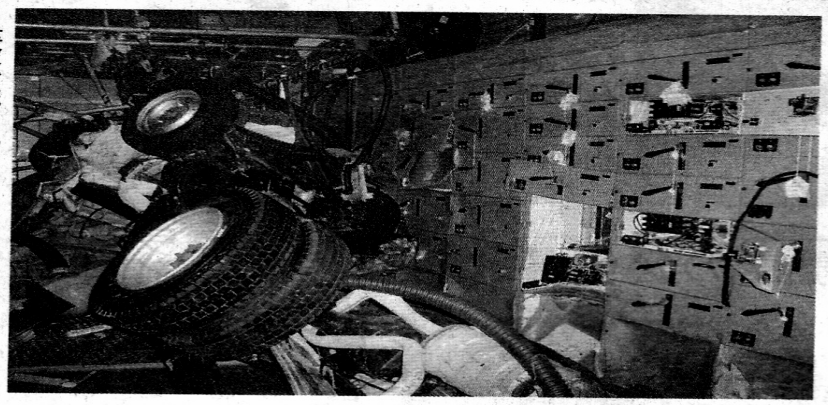
8

闇の中 4号機調査へ

口開けるマンホール

3月11日夜、放射線の測定や被ばく管理をする保安班の住吉康一(43)は福島第1原発4号機の原子炉建屋前を同僚と歩いていた。4号機タービン建屋地下に流れ込んだ海水の放射性物質濃度の計測―。それが住吉に下った命令だ。建屋内では地震後、調査に出た運転員2人が行方不明になっていた。

海抜10㍍の建屋前は道とは呼べない状況だった。泥が堆積していて、1歩進むごとに作業靴がずぶずぶと埋まった。横転したトレーラーや車、がれきが散乱し、クラクションが鳴りっぱなしになっている車両もあった。それ以外に音はない。油と潮のにおいがした。



津波で流され、4号機タービン建屋の大物搬入口の奥に突っ込んだトラック＝2011年3月（東京電力提供）

照明は一つもついていない。月明かりと、電池切れ寸前の懐中電灯だけが頼りだ。周辺にあるほとんどのマンホールのふたが津波で外れていた。穴の黒と、ふたの黒、それに水たまりの黒。見分けがつかない。

「落ちたら死ぬな…」

足が恐怖ですくんだ。「あれはマンホールだ。気を付けろ」。同僚と肩をくっつけるように慎重に歩を進めた。

住吉はようやくたどり着いた4号機タービン建屋南側の大物搬入口でうなった。分厚い鋼鉄製の扉が「くの字」に曲がって建屋内にめり込み、中にはトラックが突っ込んでいた。

搬入口付近のがれきによじ登って、建屋内に入ると、目の前に地下へと通じる階段があった。

建屋内は真っ暗だ。地下はどうなっているのか。階段を数段下りると、懐中電灯の弱いオレンジ色の明かりに何かが反射した。海水だった。

「これ以上、行けねぇ！」。住吉は後ろにいた同僚に叫んだ。

「この時、津波で地下が水没したんだと初めて気づきました。こんなことがあるのか、と。そうしたら海鳴りが気になりだしました。また津波が来たら命はないだろうな、と思いました」

免震重要棟から直線で約600㍍しか離れていない4号機を往復するのに2時間を要した。

事故当初の第1原発では、こうして多くの作業員が暗い現場に何度も出て行った。頻繁に余震が続き、いつまた津波が来るか分からない。建屋周辺に行くことが常に命の危険や恐怖と隣り合わせだったことを、このころの政府やマスコミはもちろん、東京電力本店すらも十分に理解していなかった。

住吉の計測で4号機地下の水は汚染されていないことが判明した。報告を受けた東電本店は行方不明だった運転員2人の捜索のためダイバーを派遣したが、14日の3号機建屋の水素爆発で捜索は見送られた。

24歳と21歳の運転員は30日、タービン建屋地下で死亡しているのが確認された。（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　前田有貴子）